



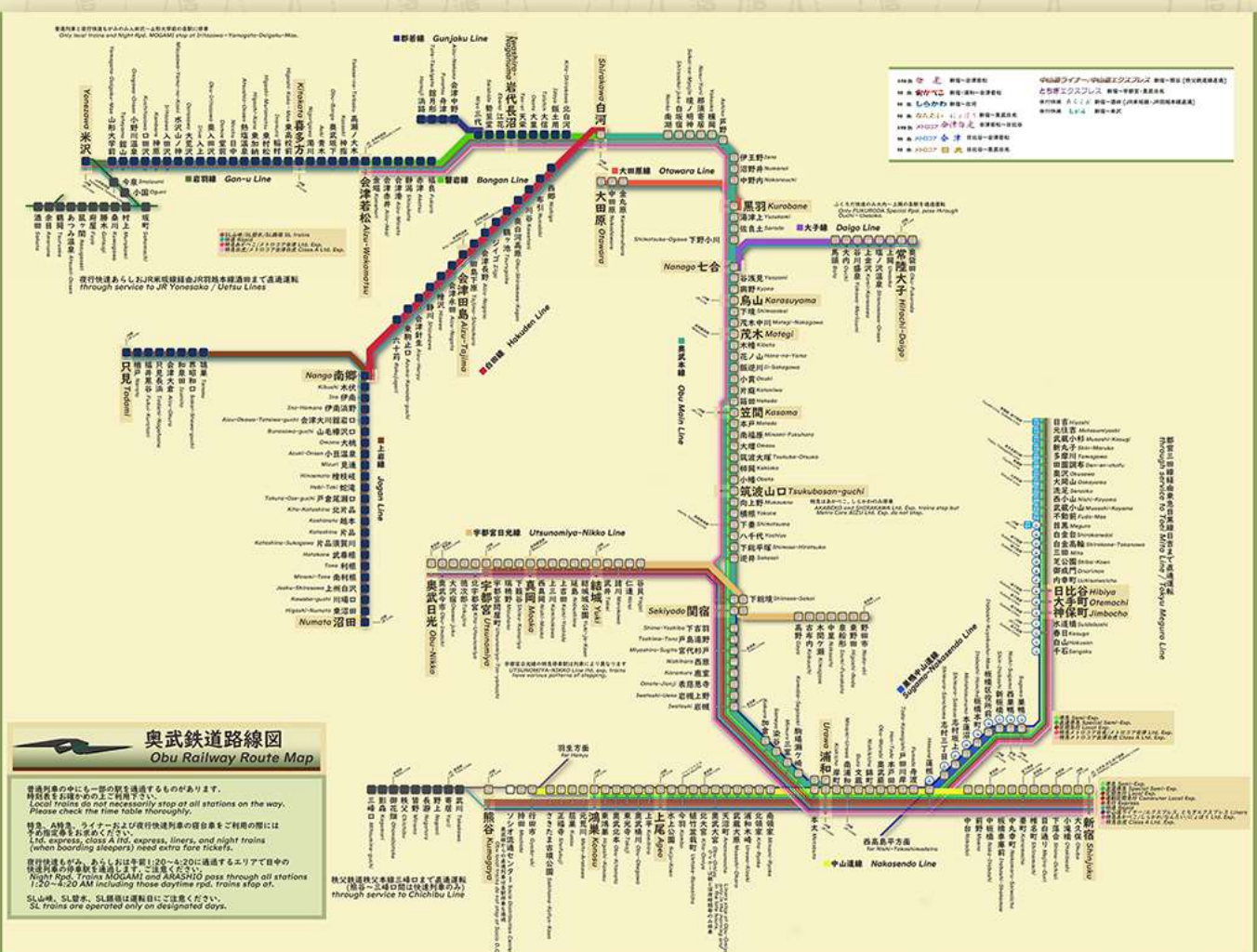
# 奥武鉄道

作者：蒲生 暁径

戊辰戦争で荒廃した会津。その有志が旧奥羽越列藩に呼びかけて若松から四方へ抜ける鉄道建設を目指して興した蒸機鉄道の奥羽越鉄道。

日本鉄道に通過され危機感を持った旧中山道板橋宿、蕨宿の商人が日本鉄道に対抗して創業した電車軌道の中山道電気軌道。

この2つの潮流が昭和9年に一つとなり、当時の東京市から埼玉県中心部を通過して北に抜ける一大私鉄が形成されました。今では1都7県、総延長802.7km(第二種鉄道事業者区間8.6kmを含む)に亘る大手私鉄として、都内から埼玉県方面への通勤輸送と日光、会津、奥会津、尾瀬への観光輸送、福島県南部～山形県置賜地方間の貨物輸送を軸に事業を展開しております。





## 旅程表

日付	発駅/停留所	時刻	列車/バス便名
2020/8/14(金)	中山道線 新宿 発	23:40	403D 夜行快速 もがみ1号 米沢
2020/8/15(土)	岩羽線 熱塩温泉 着	4:54	
	岩羽線 日中 発	6:43	803D 普通 米沢
	岩羽線 奥入田沢 着	6:58	
	岩羽線 奥入田沢 発	13:14	1001レ SL碧水1号 米沢
	岩羽線 小野川温泉 着	13:43	
	岩羽線 小野川温泉 発	13:46	26D 快速 新宿
	磐岩線 三代 着	15:46	
	郡若線 三代 発	15:53	976D 普通 浜路
	郡若線 浜路 着	16:08	
	浜路駅前 発	16:15	奥武鉄道バス郡若線 106便
	郡山駅前 着	17:18	
	郡山駅前 発	18:20	奥武鉄道バス郡若線 107便
	浜路駅前 着	19:23	
	郡若線 浜路 発	19:31	857D 普通 熱塩温泉
	岩羽線 熱塩温泉 着	21:10	

### 運賃・料金

新宿～熱塩温泉 普通運賃 6750円 個室寝台 3050円  
 日中～奥入田沢 普通運賃 320円  
 奥入田沢～小野川温泉 普通運賃 420円 SL列車指定席 1000円  
 小野川温泉～郡山駅前 普通運賃 2720円 バス運賃 1070円  
 郡山駅前～熱塩温泉 バス運賃 1070円 普通運賃 1620円



## —【続「日中へ」 白菊の詩】—

「温泉というのも名ばかりの、およそ観光地風情のない小さな駅」そんな風を感じたのは早四十余年前。私は草色のくたびれた気動車の、幾多の旅人に踏まれ使い込まれたステンレスむき出しのステップを見下ろしその日を思い出した。俯き顔の勤め人が足早に終電を目指す週末深夜の副都心新宿を出て夜の闇を抜けてきた快速もがみ1号は、早朝の空気も澄んだ無人駅に私ただ一人を降ろすと名残惜しむ様子もなくブルンッとエンジン音も豪快に駅を出ていった。そして迎える者もない板壁の塗色が剥がれた木造駅舎に、私は確かにあの日の祖母の丸い背中を見ていたのである。

熱塩温泉駅からとなりの日中駅前まで時刻表によれば約6キロ、それもその内3キロほどは明戸ループトンネルの長さが占めるのだから、実際には3キロか。歩いて歩けぬ距離ではない。押切川に沿った、車の影一つ見えぬ県道のご真ん中を、まだ青い稲穂を眺め夏の名残のおせ返りような草の匂いをいっぱい吸って闊歩する。朝陽はようやく西の山の頂を照らすばかり。山の上を走る国道121号に時折長距離のトラックが行き交う外は道路際の草むらに早くも鈴虫のささやかな音が聴こえるのみ。山裾に会津独特の茸のような三角屋根を構える常繁寺さんのお堂の前でしばし足を止めて軽く会釈。さらに北へと進み県道から分かれる道を千石沢と呼ばれた集落へと入ると景色が一変した。かつて農地だったはずの場所は野生へと返った向日葵が群れ、そのこうべの向く先、東の山肌に奥武線の付け替えられた線路が高々と横たわる。あの頃はまだなかった山の上の線路もすでに草に覆われている。半世紀近い時の流れを噛みしめると、遠くから国道のトラックともまた違う地鳴りのような音。DF500形ディーゼル機関車が3両、コンテナ列車を長々と繋げてダム湖の縁を超えてくるのが目に入った。あれは早朝の上り882貨物列車か。遠い日を思ううちにうっかり「見る鉄」してしまったのは残念だが、今日はまだまだ撮る予定がある。ループトンネルへと消えていくDF500を横目に、私はダム工事で山の上に移設された日中駅へと長く草生した階段を昇って行った。

地上から高さ90mの山肌を削って造られた現在の日中駅へは草に覆われた階段を昇っていく。昨夜は雨でも降ったのだろうか、湿った地面はとところどころぬかるみ、朝露が輝く中を行くうちに、靴はすっかり泥まみれ、そして草に埋もれたブラットホームに着く頃には夏のじめっとした熱気の中体もすっかり汗まみれだ。見下ろせば眼下にはたった一軒の温泉宿を除きおよそ人の気配のなくなった千石沢の集落跡。そしてその猫の額のような平地を巨大な水塊から守るべく立ちはだかる日中ダムの無機質な壁。これが、私が小学校の何年かを過ごしたあの村の、今の姿なのだ。しばらく待つと、自村沢の鉄製橋梁を渡る列車の音がこだましてくる。6時43分発の803D普通米沢行き、日中駅にとってこの日最初の、そして最後の下り列車だ。やはりキハ4000系の草色の気動車で運転される普通列車は、日中を出るとひざわ湖の湖畔に沿って山沿いを登る。車窓右手にダム湖に沈んだ旧ループ線の出口を探したがすでに草木に埋もれ良く分からない。反対側、車窓左手には朝陽に照らされる山々を穿つように新しく開通した国道121号。人間というものはかくも自然に挑み、切り刻むものなのか...

小さな沢筋を急勾配で登り詰めた先、人里離れた堂前の駅を経て、列車は県境の長いトンネルへ。急に線路が平坦になるのだろうか、列車の走行音が心なしに軽く感じる。大峠を貫く長いトンネルの先に見えた光の中へ飛び出すと、車窓左手ループ線のはるか下にこれから半日を過ごそうという奥入田沢の駅が見えてきた。







貨物列車同士の離合を前に、すっかり酔ってしまった。ここで一人乾杯とでも行きたいところだが、どこに熊がいるか分からぬ森の中、食べ物や飲み物の持ち込みは厳禁である。草っ原に足を投げ出して空を行く雲を眺めるうちに時を忘れていた。

ファーン！声量のある大きな警笛に目を覚まされる。おっと！と飛び起きると11時10分。上り20D快速列車新宿行きが奥入田沢の駅を出てくるではないか。慌ててカメラの設定を直し、ループトンネルを駆け上がった列車が手前の鉄橋を渡るまでには何とか間に合った。かつて私と母を乗せて新宿から会津の地へと運んだ草色のディーゼルカー、キハ4000系。それが四十年以上を経た今でも現役というのが嬉しい。この20D快速列車を撮れば次の被写体である下り03D快速列車と上り貨886列車の離合までわずか1時間。うかうか昼寝をしてもいられない。果たして真昼のトップライトが少々残念だったが、朝一番の下り快速である03D列車と貨886列車の離合は先ほどから少し離れた木の隙間から1枚。重連で峠に挑むDF500から、機関士がキャブから身を乗り出して信号歓呼している姿が小さく写りこんだ。貨886列車は小野川温泉から鉾物列車を併結する重量貨物。ループトンネルを回ると、先ほどの貨884列車より一段大きなきしむような音を谷間に響かせ、ひときわ黒々とした油臭い煙を空に吹き上げつつファインダーの中に大写しにしたガーダー橋をゆっくり、どっしりと渡っていった。

満たされた思いで山を下り、小樽川の清流を渡って奥入田沢の木造駅舎で涼をとる。さて困ったことには、水の一杯も飲みたいところだが野生動物対策だろうか、駅前には自販機の一台もないのだ。駅前の小樽川の流れる音だけが涼しげだが、体はいい加減汗でべとべとだ。

13時、地の底から響くような重低音がこだまし、頭上の山肌にぼっかりと口を開けたトンネルから、獣の吠えるような野太い汽笛が聴こえてきた。D51重連牽引、SL碧水号のお出ましである。ガーダー橋を渡る列車を駅ホームから見上げて撮影したのは言うまでもないが、ループトンネルを下って前灯の光もあかあかと駅に入線するところを背後の鉄橋とともにカメラに収められたのも嬉しかった(こんな駅撮影の聖地で他に乗客がいないとは！)。

今一度汽笛一声、自動化されていないドアから客室内に入ると、指定席のほとんどが埋まった週末運転のSL碧水号の旧型客車列車はゆるやかに奥入田沢のホームを後にした。岩羽線の線路に絡みつつ寄り添う小樽川はいずれ鬼面川と名を変え、入田沢の先まで車窓を彩る。白河駅から米沢駅まで、日本最長となる160km超を駆け抜けるSL列車、碧水号。相席はいないものと思っていたら奥入田沢から私が乗ってきたことで驚いていた向かいの席のご夫婦は、私が次の小野川温泉で降りて行ったことで二度驚いていたようで目を丸くしていた。







米沢郊外の湯治湯、小野川温泉では文字通りのキックターンで下り SL 碧水 1 号から 26D 快速新宿行きへ。目指すのは新宿…ではなく、磐岩線三代駅だ。朝から昼過ぎまでを過ごした大峠の鉄路を越え、途中会津若松で前に 3 両を増結したキハ 4000 系の 26D 快速列車を三代で乗り捨てる。向こうのホームで待っているのはあかね色が可愛い古参気動車、キハ 100 形。15 時 46 分三代発の 976D 浜路行きは昼下がりの黄色味を帯びた空気の中を淡々と進む。波もない猪苗代湖畔に短尺レールを刻む台車のリズムが優しい。湖畔から少し離れた山にぶつかる浜路駅はいかにも盲腸線の終点といった風情。駅舎の前には期待していたあいつが…そう、ボンネットバスである！週末のみ郡山駅前～浜路駅前のバス路線で運転されるボンネットバス。整理券を取って乗車すると、乗客は自分一人。運転手さんはくるっとこちらを一瞥すると「発車しまーす」と気のない声を上げてドアを閉めた。床面も座席も高い腰高なバスがガラガラと大声をあげて走り出す。峻険な御霊櫃峠を越え郡山を目指すバスは次第に暮れ行く中車内の明るさを増していった。黄色い白熱球に照らされた車内に、一人、また一人と地元のご老人が乗ってくると、郡山の街の灯が見えるころには車内は半分以上の席が埋まっていた。ピンポン！突然 LINE の通知が鳴る。「部活の合宿でハケ岳！めちゃ涼しい！！お父さんお土産は乾燥喜多方ラーメン 4 人前一折ね！！お母さんたくさん食べたがってたから、8 食分かな」見た目ばかり気にしている次女と違い、もう間もなく受験を迎える長女は食べることに屈託がない。

郡山では折り返しのバスまで 1 時間あるので近くの蕎麦屋に入る。カウンターに見かけた顔が、先ほどのバスの運転手さんではないか。「やおお客さんもですか。それにしても浜路から乗り通す人はなかなかいないくてね。」東京から来たこと、昔日中ダムの足元に住んでいたことなどを話すをそれはそれはと驚いていたが、後刻再び浜路行きのボンネットバスに乗ると、さらに 3 倍ほど驚いた顔で「あ、どうぞ…」と。

ボンネットバスで浜路から郡山まで折り返し乗車する旅行者なんてそういないのだろう。19 時 20 分過ぎ、白熱球のオレンジ色で車内を染め上げられたボンネットバスですっかり夜の帳の降りた浜路の駅に戻ると、先程のキハ 100 ではなく、私にとってはこよなく懐かしいキハ 4000 系の普通列車がドアを開けている。19 時 31 分浜路始発の 857D 普通列車熱塩温泉行き。キハ 4000 系で夜の軌道を行く静かなる時。途中三代ではこちらのスイッチバック準備中に下り特急あかべこ 19 号会津若松行きが、そして福良ではこちらが停車している間に上り特急あかべこ 24 号浦和行きが、ほの暗い駅に刃物のようなシャープな車体をぎらつかせて通過していった。父と別れ郷里を頼る母に連れられ、初めてのディーゼルカーに乗った四十何年前の「僕」。母はあれやこれやと手を尽くし、僕を進学させてくれた。そして社会人になった僕は会津を出て東京の地へ…。あの日白河の駅で見た、ピカピカに輝いていた当時最新鋭の 950 系特急あかべこはその後経年とともに「あかべこ」ではなく「べこべこ」と仇名され、2007 年に現れた 10000 系電車によって取って代わられた。その間も変わらぬ猪苗代湖を見下ろす鉄路を、会津盆地の稲穂を愛でる鉄路を、草色のキハ 4000 系が走り続けている。あたたかなモケットに半世紀近い年輪を滲ませて。

今夜の投宿先はもちろん、あの色気ない木造駅を降りた熱塩温泉だ。いや、帰る実家もなくなり、こうして敢えて近所の熱塩温泉に泊まるのは初めてかもしれない。ひとまずは湯に浸かってゆっくりと休もう。そして明日、陽が昇ったら押切川に沿ってまた、歩くのだ。黄泉の国より今週末限定で常繁寺さんの片隅に戻り首を長くして僕を待っているであろう、祖母と、母に真っ白な菊の一輪を届けるために。



窓をめいっぱい開け放して

行こうよ奥武

あの日夢に見た鉄路の果てまで



奥武鉄道

ウェブサイト：<http://www.obu-railway.com>

Twitter：[@oburailway](https://twitter.com/oburailway)



おーひい

